Stray

煌輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｓｔｒａｙ

【Ｎコード】

Ｎ７３３９Ｂ

【作者名】

煌輝

【あらすじ】

異世界で繰り広げられるある四人組の物語。彼等の旅には目的もなければ、終わりもない……はず。

プロローグ

未来でも、過去でもない、
「今」という時。

この世界に似て、この世界ではない所で。

私達と似て、私達と違う人々と生き物が生きる世界。

そこがこの物語の舞台である。

しかし、物語といっても、話は一つではない。

今から私が語るのはほんの一部にしかすぎないのだから。

何故なら、それぞれの物語に
「終わり」という言葉が存在せず、時間のように流れては続いているからだ。

その世界で生きる人々が紡ぐ様々な物語は、悲しい話から笑える話、ありきたりな話から非常識な話と様々。

そんな数多くある物語の中から、とある四人組の話をしよう。

彼等は旅をしていた。
ただ……、目的が無かった。

1，始まり

……前は『ドル』（ナメクジに似た小型のモンスター）の団体様。後ろは『ラトン』（ネズミとウサギを合わせたような中型のモンスター）が二体……。

こっちは四人。レベル的に見れば勝てなくもないが、上手く作戦を立てなければならないギリギリのライン。

「……どうする？」

反応無し。どうやら逃げる気は無いようだ。心強いが、せめて一言で良いから返事はして欲しい。

そんな愚痴に近い思考をしているうちに三人は動き出していた。

最初に動いたのは、ドルに向かって、炎の球を放ったクロア。下級の呪文を連発する事で、大量のドルを激減させていく。

一方で、ポールアームを構えるナーダとナックルをはめたキルもそれぞれラトンに先制。

頼もしい仲間の戦いを傍観する俺にクロアの冷たい視線が炎の球と共に飛んできた。

手伝えと言う、合図に応える為、炎の球を回避しつつ抜刀。残ったドルを適当に攻撃。

剣を戻す前にしゃがみ込む。すると、先程まで頭があった位置に巨大な刃物が通過。

「……ナーダ。俺に恨みでもあるのか？」

「何の事ですか？」

長く、蒼い髪を一本の三編みにした青年は笑顔で俺に聞き返した。

「……毎回隙があれば俺に攻撃してくるのがお前の習慣なのかって事を聞いているんだ」

「そういう事ですか。はい、そうです」

？

言葉の代わりに剣で返事をするが、それを予知していたナーダはポールアームの柄で俺の斬撃を受け止める。

「レイド」

「なんだ」

「私の首を取っても貴方に特は無いですよ」

両腕で俺の一撃を押さえるナーダはいつもの笑顔で訴えてくるが、俺は更に力かけて答えた。

「これが俺の習慣みたいなものだから安心しろ」

「安心しろと言う割には先程から力を強くしてませんか？」

「気のせ……っだ！」

「……いい加減にしろ」

俺等の下らない漫才に飽きたクロアは下級レベルの氷の呪文を俺目掛けて飛ばしてきた。

「敵も倒しましたし、次の町に行きますか」

「今日は宿で寝たいな」

「お金あるの？」

「無い時は、ナーダが稼い……」

「……人に頼るな」

2，着いて早々

「……お金が無くなってる…」

焦げ茶の小さな革袋を裏返し、深緑の長い髪を持つ少女は言った。普段は驚く事が滅多に無い彼女もさすがに驚いているようだ。

「落としたのですか？」

「ううん……。…酒場に入る前は確認した時はちゃんとあったのに……、今見たら……」

少女、クロアが言い終わる前にナーダとキルの視線が何故か俺に向けられた。

「言っとくが、俺が盗ったならここにいないぞ」

「本当ですか？」

「レイド、嘘はドロボーの始まりだよ」

「勝手に断定すんな。それに、泥棒は盗るが仕事だ」

「……」

「クロア、お前信じてないだろ」

「しかし、これの支払いどうしますか？」

俺の言葉を無視して、ナーダは自分達の前に置かれたテーブルの上に置かれているモノを指差した。

それは5センチ平方くらいの小さな紙である。この紙自体には何の問題も無いんだが、紙にかかれた文字と数字が問題なのだ。

「このままだと怒られるよね？」

一人、オレンジジュースをストローで飲みながらキルは心配そうに言うが、この数字を作った元凶は俺とお前である事にいい加減気付いて欲しい。

「あー、逃げ……っが！！」

「仕方ありません。レイドの剣を担保にしてお金を作りましょう」

「……ゴメンナサイ」

「クロアのせいじゃないから、気にしちゃ駄目だよ」

クロアの放った氷の塊を見事頭上から喰らった俺が痛みをこらえている間に問題解決。

しかし、よく考えれば、剣の無い俺が一緒に依頼にいっても役立たずだ。今回はサボれる！

「そうわけなので、レイドの剣は武器屋に売ってきていいですか？」

「あぁ、いいぞ。ほら」

「……はい」

素直にナーダに剣を渡すと、その代わりにと、クロアが一本の剣を俺にくれた。

「何で魔導士のお前が剣を？」

「……護身用のストック」

「へぇー、護身用のストックにしては業物だな…って、お前剣持ってたんだ」

「……うん」

どうやら、サボる事は無理のようだ。

「それでは、今すぐ売ってきますね」

そういって、ナーダとキルは酒場を出た。

3，紹介

二人が戻ってくるまでの時間を有意義に過ごそうと、俺は席を立つが、クロアに睨まれた。仕方なく、俺はまた木製の椅子に座った。せっかくの時間を無駄にするのもあれだから、自己紹介でもしょう。

俺の名はレイド・ジングリム。
この酒場にいるほとんどの奴等と同じ、冒険者だ。職業は戦士だが、昔のくせで盗賊の技術も持つ変わり種だ。まぁ、そのお陰で専門外の依頼も受ける事が出来るから良しとするか。

俺の右隣で黙々とケーキをつっついているのは、魔導士のクロア・ツェレ。
深緑の長い髪と、翡翠の瞳が特徴の小柄な少女だ。メンバー内では最年少だが、どんな時でも冷静な判断が出来る事から、路銀の管理を担当している。
普段から無口で無表情な為、何を考えているのかは俺達でも分からない。俺が知っている事といえば、無類の甘党である事くらい。
今も滅多に見る事の出来ない笑顔でケーキを味わっている。この時だけは歳相応の少女になるのがクロアだ。

武器屋に行っている為、今はいないが、町に着く前に何度もポールアームで俺に切りかかってきたのは、吟遊詩人のナーダ・アルマ

ン。
蒼く、長い髪を一本の三編みに結っている長身の青年。クロアとは違い、いつも微笑んでいるような顔をしている。詩人なのに、楽器を奏でるよりも、ポールアームを振り回す事が多いのが日課だそうだ。
依頼での交渉を担当するが、会話術に長けている為、買い物での値切り担当でもある。

最後に、ナーダに付き添って、武器屋に行った、武道家のキルギス・ツェレ。
薄紫が混ざった緑の髪と、翡翠の瞳の青年。クロアとは瞳の色以外似ていないが、れっきとした兄妹である。冷静沈着なクロアとは違い、感性豊かなキルは実年齢より幼く見られるが、本人は気にしていない。温厚な性格なので、モンスターとの戦闘や依頼の時以外はその拳を使わない。お人よしともいうが、そこがキルの良いところだ。
しかし、極度の迷子症な為、目が離せない。今回はナーダの付き添いで出掛けたが、まさか、二人が帰って来ないのは……。考えるのを止めておこう。本当だったら困る。

そんなマイナス思考を打ち切ると、クロアが席を立った。

「……キルが迷子になった」

俺は何で分かるのかは、あえて聞かない事にした。

4，ランク

「なぁ。ホントに無いのか？楽で報酬の良い依頼？」

テーブル席からカウンター席に移った俺はマスターと話をしていた。

クロアがキルを探しに酒場を出る時に依頼を探しておくよう頼まれたからだ。本当は、あっちで盛り上がっているカードに交ざりたかったが、頼まれたので諦めたのだ。

「そんなウマイ話、誰だって欲しいに決まってるだろう」

「まぁな。じゃあ、モンスター討伐とかの依頼は無いか？」

「それならいくつかあるが、兄ちゃんランク何だい？」

やはり、ランク制限ありか。あまり見せたくないが、俺は首に下げていた長い鎖のついた金属製のプレートをマスターに見せた。

『レイド・ジングリム、戦士、１９歳、Ａ』

「ランクAならここらへんだな」

プレートを見て、ランクを確認すると、マスターは十何枚かの紙を束にして纏められた依頼書を俺に渡した。

「……多くないか？」

「最近はどうも討伐依頼の報酬が低くって、誰も引き受けてくれないんだよ。逆に、護衛とかが増えたな」

「時代が代わりつつあるんだろうな」

依頼書を受け取るなり、俺は依頼書を流して見た。

ランクとは、モンスターをどれだけ倒したか。どれくらい強いモンスターと戦ったをこのライセンスプレートが魔力の力により記録し、決まる冒険者の強さ。レベルの事である。

今回の依頼書に載っているのは、ランクCのモンスターであるが、数が多すぎる。人間による生態系の崩れが原因だそうだが、面倒臭…。

この数で、ランクCのモンスターを倒すには、冒険者のランクはBが最低ラインだから、楽な仕事ではないな…。

「そういや、兄ちゃんの連れもランク上なのかい？」

俺が依頼書を真剣に眺めているのを見て、マスターはもう引き受けてくれると思い込んでいるようだ。

「……あー、Ｂの魔導士と、Ａの銀色遊詩人に、ＢとＡの中間の武道家だ」

「それなら、この依頼受けてくれないか？ちゃんと相場分は払うからさ」

そう、ランクの一番の違いは、依頼ではなく、報酬の相場である。俺達のように平均Ｂランクのパーティーは面倒な依頼を受ける代わりに、報酬が良い。ただ、『面倒』な依頼しか無いが。

5，依頼の内容

「……それで、この依頼を引き受けたんだ…」

酒場から貰った依頼書をパラパラとめくりながらクロアは言うが、それどころではない俺は返答しなかった。

「なんでこんな依頼を引き受けてくるんですか！」

「ウルセェ！俺だって好きで引き受けたんじゃねぇー！！」

その時、自分の剣が無い俺は、ナーダのポールアームを白刃取りの要領で受け止めていた。しかし、俺は床に座っているというより、身を起こしているという無理矢理な体勢なので、ヤバイ。このまま続けば巨大な刃が俺の頭上に落ちてくる。しかも、ナーダの目は半分本気だ。

「ねぇ、今回はどんな依頼なの？」

一人、話についていけないキルの発言により、ナーダはポールアームを下ろし、キルに説明し始めた。

「今回の依頼は、この町の東南にある洞窟に棲息するモンスターの討伐で、Bランクの依頼ですが、そのモンスターが問題なのです」

「何を相手にするの？」

「……『鬼』だって。しかも、数が多過ぎるのがちょっとね…」

『鬼』とは、俺達と似た姿形をしているが、頭か額に角を生やしたモンスターの事である。
俺達より二、三回りもある巨体は筋肉と言う名の鎧に覆われ、一般人では傷つける事が出来ない。知能が高くはない代わりに、その筋肉から生み出されるパワーは自分よりも大きな岩を素手で破壊するほどだ。しかし、それは普通の『鬼』の話しだ。この依頼書を見る限り、この洞窟に棲む『鬼』達は棍棒などの原始的ではあるが、武器を使い、群で動くと書かれていた。

「ただでさえ危険とされている『鬼』が武器を扱い、群で行動すると言う依頼を引き受けるなんて…、レイド。貴方は何を考えているのですか？」

溜め息をつきたいのか、ナーダは深呼吸をする。きっと、ここで溜め息をついたら、残り少ない幸せが逃げると思ったのだろう。

「でも、いつかは誰かが退治しなくっちゃいけないんでしょ？それなら僕らがやろうよ。早くしないと、町の人困るもんね」

とても１８歳の男には見えない、純粋な笑顔でキルはナーダに言った。さすがに、キルにここまで言われるとナーダも黙った。

言い忘れていたが、キルの担当は調停だ。どんな事も受け入れる楽観的な考えと、優しさがあるからだ。

6，準備

酒場で騒ぐだけ騒いだ後、俺達は長旅で不足した薬草等の物資を揃える為に道具屋に行く事にした。

「いらっしゃい。おや、見ない顔ですね。もしや、冒険者ですか？」

店に入ると、初老の男が俺達に声をかけてきた。どうやら、この男がこの店の主人のようだ。

「そうです。薬草が切れたので補充に」

微笑み返し、返答するナーダは主人と交渉をするが、思った以上に安かったので、いつもの値切りも無く、そのまま世間話を始めた。その間、俺は店内を眺めた。道具屋のわりには武器、特に剣が多いのが気になったからだ。主人の収集物かもしれないが、どれも無銘の物で余計気になった。

「『何故、道具屋に剣が？』でしょう」

主人は俺に微笑みかけて言った。主人の視線に気付かないほど俺はその剣に見入っていたようだ。

「実は私の息子も冒険者だったのですよ」

そういうと、主人は近くに飾られていたこの地域では珍しい細身の長剣を手に取り、抜いた。

両刃の細い刀身には細かいの細工がされていて、光の当て方によって様々な模様を見せた。

「……きれい…」

冒険者の中で、剣に最も無縁である魔導士の素直な感想に主人は嬉しそうに微笑んだ。笑顔がよく似合う主人は剣を鞘に納め、元の場所に戻した。

「実は、ここにある武器は全て、息子の物なのですよ」

「すごーい。こんなにたくさんの剣を使ってたの？」

「いいえ、殆どは使う前にここに置いていかれました。手入れだけは私が代わりにやっているので、まだ現役ですけどね……」

そこまで話すと主人は苦笑した。どうやら、触れてはならないものに触れてしまったようだ。

「冒険者は常に危険が付き纏います。どうか貴方達も気をつけて」

「…あぁ、忠告アリガトな」

主人の顔を見ていれなくなった俺達は店を出る事に。

「あ、待って下さい！！」

扉を閉める前に主人に呼び止められた。

「…何か？」

すると、主人は先程俺達に抜いて見せた細身の剣を俺に渡してきた。

「良かったら使って下さい」

「何で俺なんかに？」

主人はただ笑い、何も言わなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7339b/

Stray

2010年10月20日00時41分発行